

佳作

夫婦の絆

熊本県ルーテル学院高等学校二年 石原叶望

私の祖母と祖父は正直に言うあまり仲が良くないのです。それは、いつも私のことで議論になることが多く、私はとても大切にされているんだとありがたく感じる一方で、この二人には仲良くしてほしくないなど常にも思っていました。祖母は本当にいつも元気で明るく、高齢者とは思えないほど活気にあふれている人で、祖父は頑固で自分の我を通すタイプの人だから、意見が噛み合うような二人ではありませんでした。私自身もこの二人がどうやって結婚に至ったのだろうといつも不思議でした。そんなある日、部活動帰りに母から一本の電話がありました。それは、祖母が急に倒れて病院に運ばれたというものでした。私もそれを聞き、慌てて病院に駆けつけました。しかし、すでに祖母は手術で会うことはできませんでした。病名は蜘蛛膜下出血というもので、下手をすると、死に関わる恐ろしい病気でした。手術には十時間以上かかるというので、私は帰宅を強いられましたが、家に帰ってから何だか恐ろしく、なかなか寝つけず、

りました。あんなにいつもけんかばかりしていた二人が、手をとりあっているその貴重な姿は私には印象的だったからです。そのとき、改めて私はこれこそが夫婦の形なんだと痛感しました。高校生の私にはまだ分からないけれど、あの瞬間、「夫婦って素敵だな」と感じたのです。今でもその瞬間を思い出すたび、なぜか胸が熱くなり、涙がこみあげてくるのです。そして、祖母が入院してから毎日、祖父は病院に通い続けました。そして、祖母にご飯を食べさせたり、車いすにのせて一緒に散歩したりを繰り返していました。私はとてもうれしかったです。たしかに、祖母が失ってしまったものは多くあったかもしれませんが、でも、その反面、得たものも大きかったのです。不思議と祖母は回復力も早く、いつも笑顔でいました。これは主観的かもしれませんが、祖父との時間を幸せに感じていたからこそではないかと思うのです。私自身も、祖母への遠慮はなくなり、話しかけられるようになりました。最初、曖昧だった祖母の記憶も次第に戻ってきて、私を孫として認識することもできるようになり、会うたびにニコニコしてくれる機会が増えました。やがて、退院が決まり、祖母は祖父が家で面倒をみることになりました。祖父に何度も一人で面倒を見れるのかは心配して尋ねましたが、祖父は

「大丈夫。」
と頑なに言い張り、一人で祖母の面倒をやったのけよう

ただ心配で仕方ありませんでした。そして次の日、母から手術は成功したと聞かされ、ようやくほっとしました。そして、すぐにいつもの祖母に会えるという気持ちでいました。しかし、その考えはとても甘いことを後で思い知らされました。命の代償として、祖母は歩くことも自分でご飯を食べることもできない状態になっていたのです。さらに、言語障害がこれから出てくるだろうともお医者さんに言われました。そして、祖母は一時的に意識がはっきりするまで病院で入院することが決まりました。手術をした後の祖母は、目も開かないし、話もしません。私の知っている祖母とはまるで別人でした。私は

「何かしゃべってあげなさい。」
と家族に促されましたが、かける言葉も見つからず、ただ祖母の姿を呆然と見つめることしかできませんでした。そして、お見舞いの別れの際、身内全員が祖母から離れた時、一人だけその場を動かず祖母に近づいた人がいました。それは祖父でした。他の身内は気を使い、

「先に帰ります。」
と祖父に告げ、次々とその場を去っていきました。そんな中、祖父はゆっくりと祖母の手を握ると、自分の頬にあてて、

「また明日くるからな。」
とずっとつぶやいていました。その時の祖父の目はうるんでいました。私はその二人の光景に目がくぎづけにな

としていました。さすが、頑固な祖父です。でも、それは祖父の、祖母への愛情の深さからくる言葉だったのだと思うのです。そんな中、祖母自身もハンカチやタオルをたたむことをいつの間にか習得しており、祖父が置いていたハンカチをたたみ直したりしていました。そんな二人の日常の光景は、なんだか微笑ましく、私は今でも幸せな気持ちになるのです。